

+ 4 【ひこばば】

懐爺にきいたことがあります。

「かいじいは、どういとおばけがいちばんこわいんかのう」

「金ちゃんはどうですか」

「わしは、へびがにがてじゃから、へびのおばけがやっぱりいちばんこわいのう」

適当に返事をしておきました。

ぼくにとって、おばけはこわい以上に好きなので。

「そうですか。でもいちばんこわいのは、人間のおばけですね。わたしは年寄りだから、自分より若いおばけはそうこわくはありませんが、歳とったおばけはこわいですねえ」

「たとえば、なんじゃ」

「【ひこばば】です。火呼婆と書きます」

即答しました。

「【ひこばば】たあ、どんなおばけじゃ」

「たいへん歳をとったおばあさん、ということはわかるんですが、あとはまったくわからない。正体がわからないからこわい。おばあさんという以外はなにもわからないんです。わけがわからない。わけもわからずに火をつけるからこわい。家にも人にも火をつけます。それと、火をつける理由も意味もわからない。理不尽で、つじつまのあわない、説明ぬきのこわさですね。そういうわけのわからないおばけは、退治しにくいから、やっぱりこわいですね。それに年寄りには敬意を表さないといけませんから、【ひこばば】を退治するなんて気は、けっしておこらないんです」

「【ひこばば】から、にげるほうほうはないんか」

「【ひこばば】は、歌をうたいながら、そろりそろりとやってきますから、それをきいたら逃げるか、水をいっぱい用意するかですね。ただし小さな声ですから、よくきかないときこえません」

ひこばば

うばば

うばうばうばば
火を一つ貸せや
ひこばば
うばば
うばうばうばば
火はまだ打たぬ

この話はこれでおしまい。

懐爺が退治できないおぼけなんて、おそろしくてとても近付けないから。